

# 猪犬と登る猪猟の頂点へ 猪猟の上級編 ⑬ 田宮治

## 一流犬群による谷落とし

猪止め犬群での猪猟は、前号の理由で何度も猪を見失った感じになった。これは犬群の特徴である速攻によって先回りをして、逃げ猪が行く先を断られたことで、藪中に潜み隠れるからである。この道理を知っていれば、犬群が猪を見失った時こそ、まさに絶好のチャンスなのである。

逃げ道を断られた猪は、必ず近くの藪に潜んでいる。今やっている万全の策をとって、朝一番のいっつもと同じように止め猪猟をやることなのである。

しかし、この戦いのすべてが良

い教材であると考えた。説明どおりに猪を追い続け、攻め抜いた上で、最終目標である追い切った先で限界の止め撃ちを決めるといふ、見事な止め花を北嶋氏に咲かせてもらいたいのである。私は猪猟法のことを分かってもらいたくて、くどいほど何度も記述してきたのである。

さて、いよいよ俺流の押し出した大山の山頂にたどり着いた。その山頂から気になっていいるマロ号の動きを確認すると、マロ号は一足先に猪の見切りを完了していたようので、大きく回って猪の逃げ道を断とうとしている。

その大峰を私の思ったとおりにグルッと回り、「ジジ、猪はこの峰を越えていないよ」というように北嶋氏の待つ小沢に向かって、ヨシ号とシロ号に合流したようであ

る。

私はこの中に猪は必ず潜んでいると確信して、「2番さん、どうぞ」とトランシーバー（以下シーバー）で呼び出し、「猪は大峰を越えてはいない。マロ号たちが大杉林に向かっているので、必ず鳴き出して止めると思うので頼みますよ。返事はなくていいから……あくまで静かに落ち着いてな」と重ねて告げた。

よし、これでいい。後は犬群と北嶋氏を信じて、私にできる最高の後方支援をやるだけである。

私は犬群の動きに細心の注意を払いながら、鳴き出した時のために攻めやすい大峰筋をゆっくりと五分くらい進み、北嶋氏の待つ大杉林の真上に差し掛かった。ちょうどその時、ヨシ号とシロ号の凄いい威嚇が始まった。まるで朝一番の寝屋止めのような見事な寄せ鳴

きである。

ウーッウーッ、ワンワンと、いっつもながらの区切りのよい力強い鳴きである。すぐにマロ号も加わって咬み止め鳴きになり、ワンワン、ギャンギャン、グオーッグオーッと山が割れるような大騒ぎである。

もう四時間三十分も戦い続けているのに、全く疲れを感じさせないマロ号たちの脅威の迫力に感服する。そして自らやり通した我慢の作戦が正しかったことをしみじみと噛みしめ、ほっと安堵する。

犬たちは凄いい攻め込みで、完全な咬み止め状態である。ワンワン、ギャンギャン、グオーッグオーッが団子になって、真下の大杉林に向かって一直線の谷落としとなつた。

私は、この止め現場の七〇分くらい上の大峰から、その様子を見ていた。そして、「もう大丈夫だ。こうなると、どんな猪でも上になど登って来れない。行き着く所は谷底だ。さあ北嶋よ、ここがお前の咲きどころだ！ 今までやってきたとおり自信を持ってやってみ

ろ！」と、すべてを任せて指示は一切しないことにした。

だが、本当に彼がこの下にいるのか少し心配だった。しかし、いざとなったら断然有利な大峰にいたので、いつものように「ほら頑張れ！ ジジが来たぞ」と大声で怒鳴り、猪の上への逃げ道を断って、下で頑張る犬たちにジジの突撃ラッパを高らかに鳴らせて、一気に犬たちの所に飛び下りて行って勝負をかけたばよいだけのことだ。

こんな絶好のチャンスなのだから思いどおりに戦えばよい。猪止め現場は北嶋氏に任せた以上、ゴチャゴチャと考えたところで仕方ない。それより後方支援をきっちりとするのである。

私はそう思い直して、もし手練(グレ猪)を撃ち逃したら、必ず登って来ると思われる大杉林の中を流れる小沢の上に向けて走り始めた。この大山は思いのほか猪が多いようで、走りながら見る大峰筋の至る所には、猪様が団体で回遊した食み跡や立派な猪道が何本もある。やはり猪はここで回遊して

いるのだと改めて確信した。

これまで猪猟場については、犬たちに追われた猪が逃げ込んだ所が新しい良い猟場になると言い続けてきた。

この二年間、実際に猪を追って見つけた猟場が千葉の山にはたくさんある。「またしても猪のなる宝の山を見つけたぞ！」と、猪の多さに興味を持ちながらも大峰筋を走り、小沢の奥で猪が越えると思う所でタツを張ったのであるが、その間もウロキョロしながら猪道ばかりを探していた。

大峰筋から小沢に下りている出峰の関係なのか、GPSが全く入らなくなった。困り果ててシーバーを使おうと思ったが、これも同じく、山が幾つもあることで全く通じない。犬たちや北嶋氏と連絡は取れなくなったが、彼のことだからきつとうまくやるはずだ。

あの状態で猪が逃げたらそれもまた仕方がないことだと、さっさとタツを諦めて帰る。途中、宝の山の探検に乗り出したが、これは大事な猪がいなくなった猟場対策であると意気込み、調子に乗りす

ぎたようで、道に迷い一時間近くもかかってやっと猪止め現場の元の峰の上に出た。

シーバーがやっと通じたので「どうなった？」と聞くと、「いくら連絡しても返事がない。何してののだ！ 猪は獲ったよ」と、北嶋氏に怒鳴られてしまった。「それはよかった。おめでどう」と言ったが、こちらの状況が分からないようでもうまく噛み合わない。

私が悪いのだから仕方がないと反省しながら、出峰の急坂を大急ぎで大杉林を目指し、止め現場にやっと下り立った。北嶋氏は笑顔で私を迎えてくれ、嬉しそうに犬群の活躍や止め現場に寄り付いた様子などを上機嫌で話し始めた。

止め現場は、車を止めた入り口から続いている大杉林の中を流れている小沢の一番奥で、水が流れ始める谷底である。粘土質の両側が二層くらい水で抉り取られた川底に八〇<sup>+</sup>くらいのメス猪が横たわり、その上の草地で北嶋氏が犬たちと見張り番をしていた。

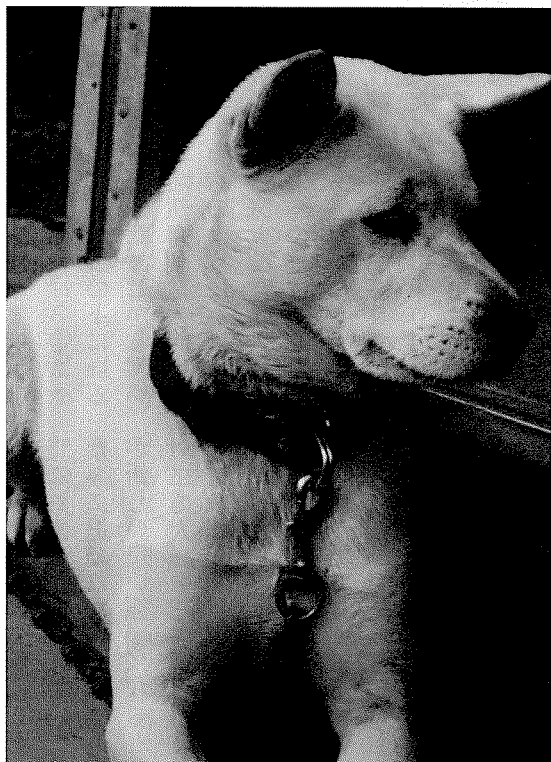
北嶋氏は「入り口から一〇〇<sup>+</sup>くらいの所で犬群の鳴き声を聞

き、杉林の小沢を四〇〇<sup>+</sup>くらい登った所で犬たちが攻め落としたこの場所に気付いた。下からでは危ないと思い、わざわざ大変な左側の山に登り、横に進みながらここに寄り付いた」と、やっと調子が出たように身振り手振りを交えて話してくれた。

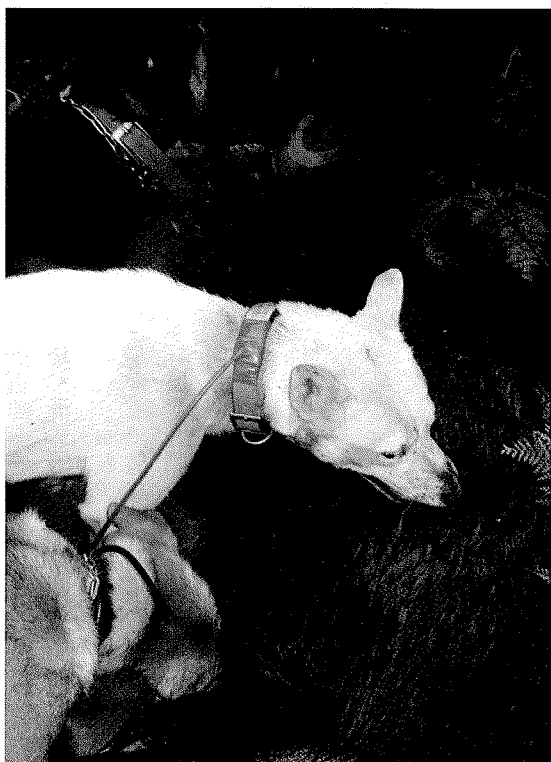
その話では、猪が谷落としされた場所は、谷底の凹地なので何も見えない。犬群の凄鳴き声だけを頼りに寄り付いたが、上にヨシ号が見えるだけで、他の犬たちは下の猪を目掛けて吠え続けているようだ。そのため、恐る恐るここに立つと、何とこの下に猪がいてマロ号とシロ号が一番奥まで追い込まれていた。

犬たちはヨシ号が上から、マロ号とシロ号が川の中に入り込んで攻めまくっている。そこを「ここからこうして撃った」と、まだ興奮が冷めやらない。

千葉の谷川は深く抉られた谷川が多いが、人の背丈以上ある所は珍しい。こんな中で真剣勝負は何度も体験できることではないので、彼の心に生涯残る大一番とな



すっかり上手になった貫祿のシロ号。止め芸は申し分ない



マロ号、シロ号、ヨシ号ならば鳴き声で状況が手にとる  
ように分かる。この時も谷底で決まった

るに違いない。「よかった、よかつた」と何度も繰り返し、がっちり  
と握手して喜び合った。

犬たちは泥まみれで、さすがに  
疲れてしまったようで、どっかり  
と横たわり、大きく口を開いた状  
態で息が上がっていた。こんな激  
戦でも全犬無傷で、私に寄り付い  
て来て、「どんなもんだいジジ、完  
勝だぞ」と言っているように、尻  
尾を目いっぱい振っている。

いつものようにコッペパン（ジ  
ヤム入り）を半分ずつ与え、タオ  
ルで顔を拭いてやり、体をていね

いに拭<sup>ぬぐ</sup>ってやった。「マロ、シロ、  
ヨシ、よしよし」と、一頭一頭の  
名前を呼びながら、「よくやった、  
えらいぞ！」と何度も褒めてやっ  
た。

この至難の一戦で見せたマロ号  
たちの犬芸の凄さと完勝の要因を  
分かりやすく説明すると次のよう  
になる。

猪止め犬でありながら、一流追  
い犬にも勝る大追跡を練り広げ、  
遂には逃げ一手の手練（グレ猪）  
を止め切り、その上で藪中で猪の  
周りを大きく回り込む極芸（ラウ

ンド芸）で逃げ道を完全に断った  
のである。

ここからが激戦の大事な勝負ど  
ころであり、わが犬群ならではの  
自慢の猪止めの実力を示す現場と  
なるのである。マロ号たちは藪中  
に潜むグレ猪に一気に寄り付い

て、全犬一丸となった凄<sup>すご</sup>い絡みで  
強烈な攻めに転じ、一直線の見事  
な谷落として、遂に絶対に逃げ切  
れない深い凹地（谷川の底）にグ  
レ猪を嵌め込んで、がっちり止め  
切ったのである。

これは猪止め犬群の極致の止め

芸である。しかもこの一戦で示し  
た犬たちの凄さはグレ猪を四時間  
以上も追い続け、戦い抜いた揚げ  
句の果てに毅然として伝家の宝刀  
を抜いたことである。この戦いぶ  
りこそが、犬群の本当の実力であ  
り凄さでもある。

私はこの一軍の犬群がぞっくり  
揃っているからこそ、自信を持っ  
てこの鎖の一戦をこだわって立案  
したのであり、居残りを続ける逃  
げの一手の手練に仕掛けた対策だ  
ったのである。

この完勝を機に、二年間で目標



(上) ブイ号、カツ号(上段)と千代号、ヨシ号(下段)、いつも後部座席に二、三頭載せて出猟している



(左) 山梨県での猟果。昨猟期は写真の橋爪氏と出猟することが多かった

としてきた「猪犬と登る猪猟の頂点」を赤裸々に解説しておかねばならないと思っている。その一つが猪猟の頂点であり、二つ目、三つ目と私が唱えた寄り付き方や鎖の一戦までもが、すべて若者たちには告知していない事案なのである。

例えば、「猪犬と登る」と言って

おきながら、実際は「若犬たちと登る猪猟の頂点」であったように、全く私の独断と偏見で実践してきたのである。私は何がなんでも猪猟の頂点に立たせたいばかりに、特に傾注したのが親方としての北嶋氏の育成である。

当然、グループの良しあしは親方の技量にかかっている。自分の

グループを楽しいものとして次世代まで守り育てて、円滑に繋いでいかなければならない。そのためには、まず尊敬される立派な親方であらねばならないし、守り育てるのが使命の親方であれば、危険を伴う猪猟では何でもこなせる達人でなくてはならないのである。

例えば、猪止め猟の中に危険に

晒された犬がいたらすぐ飛んで行き、一発で仕留めるか、あるいは猪の後ろ足を取って振り回してぶん投げるくらいの実力を持ってほしい。少しオーバーかもしれないが(人の性格によるので)、猪猟の頂点や物事の成功に欠かせないのは、登り詰めて行く道順である。中でも一番大切だと思っているのが、犬たちと一緒に登って来た体験に基づく俺流の猪猟道であり、その近道なのである。

わずか二年という近道に乗せて登って来たのだから、そのすべてが独断と先行であり、この戦いではどの部分を攻めどころにするかを話してやる程度で、後は実戦で示すというやり方である。

今日の一戦でも鎖の一戦とは告げていない。「ただ、どこまでも猪を犬とともに追って止めるから、お前は道を車で走ってタツに徹し、その先で止めた猪に勝負を掛ける」と、話してやっただけで、後は戦いの流れに合った攻め方を一方的に指示したのである。

頂点付近の至難の戦いや、歴戦の兵(グレ猪)相手の戦いにあつ



(上) 日のあるうちに凱旋。北嶋氏、坂東氏、平野氏と私(右から)。この醍醐味を猪獵人すべてに味わってほしい。



マロ号、ヨシ号、シロ号で止めた 138 kg の猪。さすがのシロ号も真竹藪で身動きがきかず、右脇腹を切られたが、このファイトで噛みまくっていた。1 m の距離から耳にとどめを撃つ

ては、必ず体験を生かした一世一代の俺流大作戦を目いっぱい押し出して、今回のように堂々と四時

間以上も戦い抜いて、約束どおり、これ以上ないビッグチャンスをお北嶋氏にプレゼントできたのだ。だから、嬉しくて嬉しくて、頂点どころか、まるで天国に昇った夢心地で、疲れなどふっ飛ん

で、やり遂げた達成感にどっぷりと浸かっていた。

猪を撃ち獲ったとしても、猪猟ではここから地獄の引き出しや寒い中での解体作業と続くので、なかなかお美味しい焼き肉やビールまではたどりつけない。

そんな大変な時に頼りになるのが、猟場近くに住んでいる山彦会

相談役の平野氏である。彼にいつものように応援をお願いし、日のあるうちに、笑顔の中ですべて無事に完了したのである。

今日は格別な大祝賀会といきたいところであるが、主役の北嶋氏と平野氏と私だけである。それでも、北嶋氏の家族総出演の打ち上げ会となり大いに盛り上がった。

「どうだ、約束どおりオヤジ(子供たちは北嶋氏をそう呼ぶ)が、この猪を撃ったよ」と、私は北嶋氏をたたえて、子供たちに今日のオヤジの戦いぶりを話してやった。

ワイワイガヤガヤとうまくいった日の宴は何を言っても様になるし、楽しさの極みである。ただ私にとって残念なことは、カラカ

ラの喉を潤す大好物のビールが飲めないことだ。どんなに楽しくても、今日は車で早めに川崎まで帰らなければならぬ。

そんな中で今回、おめでとう以外のこと、この先に繋がる役に立つ要点を言い置きたくて、あの大山は猪のなる宝の猟場であることを話すことにした。

北嶋氏に「お前も俺のことを『何をしているんだ！』と、怒鳴れるくらい立派になった。本当にオヤジは素晴らしいものだ」とおもむろに褒めてから、「だけどなあ、あの場はお前に任せて俺は猪の団体の動きを観察していたのだ。言い訳ではないが、あまりにいたなくなつた猟場を何とかしたくて、探し歩いてたのだよ」と言うと、「私もあの大杉林の中が猪の掘り跡だらけなので、この山には猪が多いなと思っていた」と北嶋氏はやっとな得したようだった。

あの激戦の中で、そこまで考えられるようになった北嶋氏はもう立派な親方である。残り少なくなつた猟期に、来週からは大山で猪猟をやるうじゃないか。もう大丈

夫だから最後の仕上げはガチンコ勝負でやってみよう。私の指示も命令もなくお互いに全力で犬群の鳴き声を聞き分けて、独自の判断で寄り付いて決めることを提案した。

北嶋氏も平野氏も笑顔で、「よし、それで行こう」ということになった。

私はようやく達成できた目標をしみじみ噛み締めながら、心から満足して、木更津から川崎まで海に架かっている高速道路をひた走っていた。

### ガチンコ勝負

その次の週末からその大山に入つてのガチンコ勝負になるのだが、その新しい猟場では全員で四頭の猪を見事に撃ち獲るという実に見事な実績を残した。だが、平野氏から「田宮さんの独壇場だ」と言われてしまった。

これは私の犬群を使った得意な単独猪止め猟であれば、当たり前なことである。北嶋氏もよく頑張つて、ここまでついて来てくれた

ものだ。彼の性格からすれば、「ジジなんぞに負けてたまるか」であつただろうし、「何をしているんだ！」と鎖の一戦で怒鳴りつけるまで成長して私を越えたと思つたのかもしれない。

若いものだからそれでよいのだが、あの一戦の大事なことは、獲りすぎていなくなった居残り猪が相手であつたことから、使う犬たちは追ひも咬みも自在の山彦犬舎でも一軍犬群でなければとても無理である。つまり、人様に教えるような見事な実戦をやり遂げた、思いどおりの素晴らしい猪猟はできないのである。だからこそ、マロ号たちを使って一気に頂点を目指してきたのである。

北嶋氏は親方として堂々とやってみてみたいだろうし、自分の犬たちを使って、自分のグループでやっで行きたいと思つているはずである。私は二年間も一緒に猪猟をやってきたのだから、その辺りのことは分かっているつもりである。

しかし、日進月歩の世の中にあつて、これこそが最高であると誰かが認める猪猟を創造し工夫しな

がら、後世まで繋げられる指導者（親方）の育成を論議し、私が独断で立案したこの頂点は、あくまでも猪猟完成の一区切りである。どこまで登つても進化し改良した道程が続く、その先にさらなる頂点があるということなのである。

今回、自慢の犬群頼りで強引に近道をたどつて登つたこの頂点も、また一廉の猪猟人（親方）がほつと一息つき、自己満足している仮の目的地に過ぎないのである。そのよい例が、絶対の自信を持った親方が誰の力も借りずに、自分で努力して仕上げた犬たちとグループ全員で、今日の鎖の一戦と同じように万策を尽くして、居残りのグレ猪と対戦してみればすぐに分かる現実の厳しさなのである。

親方としてどんなに頑張つたところで、犬芸が一流に仕上がつていない限り、鳴いて少し追うだけでは、とても猪を止め切れず、撃ち獲ることもできない。ましてや、この程度の犬群で何人のタツを張り巡らしたところで何の役にも立たないのである。（つづく）